三

三人は京橋から東海道をさらに下った。三縁山増上寺の前を通りすぎても由蔵の足は止まらない。

暗くなった通りを必死で小走りになりながら、提灯で照らす小僧の宮松の弾む息が響く。

左手から潮騒が聞こえてきた。

品川の海だ。

磯の香も磐音のはなをついた。

由蔵はさらに足を速めて品川を駆け抜けた。

なんとも健脚である。

その由蔵の足の運びが緩やかになったのは、紅葉で有名な海晏寺を過ぎた辺り、江戸府内の外を示す、朱引きの外に出たときだ。

由蔵は海晏寺の南の塀に沿って西にゆっくりと折れた。

宮松の照らす提灯の明かりが急に強くなったように感じられた。

闇が濃く、深いせいだ。

「この海晏寺裏は大井村でしてな、鄙びておるといえば格好もつくが、ご覧のとおり人の往来もないほどに寂しい」

「このようなところに今津屋野客がお住まいですか」

「さよう、茶道の宗匠梅村後流様の別宅がございましてな、世間には詫びとか寂びとかいって、風雅な暮らしをしているように装っております。だが実態は、町奉行所の目を掻い潜ろうと、取り締まりの甘い朱引きの外に逃れ住んでいるだけにございます。この梅村後流、隠れた顔は金貸しにございますよ」

ようやく今津屋と関わり野ありそうな話になってきた。

海晏寺の塀の反対側の竹藪がさわさわ鳴って、宮松は恐ろしそうだ。

「坂崎様はうちの商いのひとつに、無償で預かり、利息を取って貸し出すというものがあるのはご存じですな」

「はい」

「今津屋では町の金貸しに資金を融通して利息を得ております。そのひとつが梅村後流にございます。後流の本名は奥平右近という御家人崩れでしてな、仙台が遊びに身を持ち崩して、割下水の拝領屋敷を出たのです。右近は幼い時から金で苦労したせいで、二十歳過ぎで闇の金貸し商売に手を出したのです。烏金としょうする棒手振り相手の日貸し商いからだんだんと手を広げていった。うちでは同業に頼まれて十数年前に何十両か融通したのが、付き合いのはじまりです。利息はちゃんと入れてくれる、いい客ございました。ところが梅村後流と名を変えた数年前から、商売が大胆に、阿漕になったようなんで」

「阿漕とはどおのように」

「法外な利息に厳しい取り立て、浪人者ややくざ者を使って脅かす。時には腕ずくで取り立てに走り、金が返せぬとなると娘を女郎屋に身売りさせる。後流の用心棒の首領は一徳寺大願という剣客だそうで、十智流の剣術の達人だそうです」

「今津屋どのでは気づかれなかったのですか」

「さよう、世間の噂にのぼり始めて慌てたような次第。こればっかりは、うっかりしていた老分の私の責任がございます」

由蔵は吐息を一つ吐いた。

「近頃ではお上の取り締まりは厳しくなった。そこで後流は大井村に身を潜めて茶の湯なんぞに隠れ、まだ欲気が残った隠居なんぞを集めては、若い女をあてがって金を借りさせ、取り立てが出来ないとなると店に行って騒がせる、といった手口の商いをやっているそうで。私も今の今まで知りませんでした。それを知ったのは、神田の山車師の一家が心中沙汰を起こした一件の後でございましてな」

山車師とは、山車の飾りなどを作る職人の頭のことだ。

磐音も読売で、山車師一家が石見銀山を飲んで死んだという事件を読んでいた。

「それの背後に後流が関わっていると知ったとき、旦那様が私に、奥平右近とは即刻、商いの縁を切れと厳しく命じられたのです。そこでうちでは元金引き揚げを度々通告してきましたが、なしのつぶて。それでもあの手この手で催促は続けてきました。それがふいに、大井村にて一夕、茶の湯を催す、ついてはそこで一服茶を差し上げたい。その後、元金利息をそっくりお払いしたい、と言ってきたのです」

「それは良かった」

「はてね、そう簡単に梅村を信じて良いものか」

「なんぞ怪しむべきことがありますか」

「後流は元々侘び寂びとは無縁の人ですからね」

磐音はようやく同行を求められたわけを納得した。

行く手野道は坂道に変わっていた。

仙台坂だ。

左手に陸奥仙台藩の下屋敷があるので仙台坂と呼ばれる。

由蔵は下屋敷に通り過ぎて、大井ヶ原に入っていった。するとどこからともなく、人の話し声が風にのって流れてきた。

明かりもちらちらと洩れてきた。

「あれが梅村後流の別邸、享楽庵にございますよ」

「老分どの、後流への貸金はいかほどでございますな」

「うちでは用心していたので、五百両が元金、利息が三十二両にございます」

三人は洒落た茅葺きの門前に到着した。

門を潜ると細い敷石の道の左右には露草などが配されて繁り、石造りの小さな灯籠などが明かりを落として風流を装っていた。

格子戸の前で由蔵が呼びかけると、小粋な装いの女が出てきた。

年の頃合いは三十前後か。

「両国西広小路の今津屋にございます。梅村様に喚ばれてまいりました」

「それはそれは遠いところ恐縮にございます。主から申し付かっております。番頭さん、茶室にお越し願えますか」

「連れがおりましたな」

「お侍さんと小僧さんは、こちらの控え部屋でお待ちくださいな」

女が玄関の小部屋を差した。

「小僧はこちらで待たせていただきましょうか。坂崎様、今津屋と関わりの深いお人でしてな、お客様にも紹介しておるのですがね」

「番頭さん、お茶を一服差し上げようというだけの話、大小を携えた方は野暮というものですよ」

そう言われては、由蔵も一人で茶室に案内されるほかはない。

「坂崎様、御用は長くはかかりません」

という言葉にすべての思いを込めて、女に案内されて奥へ消えた。

磐音と宮松は、三畳間に座すと様子を窺った。

先ほどまで話し声がしていた屋敷内は、深閑として物音一つしなかった。

小部屋には小さな行灯があるばかりで、蚊がぶんぶんと飛び回っていた。蚊遣りも焚かれていない。

「老分様は大丈夫でしょうか」

宮松がおでこに止まった蚊を叩き潰しながら、磐音に訊いた。

「まあ、まってみようか」

磐音たちはなんの愛想もない小部屋で蚊に襲われながら、四半刻ほど待った。だが、いつまで待っても由蔵が戻ってくる様子はない。

半刻が過ぎた。

「ちとおかしいな」

磐音は小部屋を出ると奥に向かって呼びかけた。

「これ、こちらの方」

幾度も呼びかけた末に、ようやく先ほどの女が姿を見せた。

「おやまあ、まだこちらにおられましたので」

女は驚いたふりをした。

「と申されると」

「今津屋さんの番頭さんなら、とっくにお帰りになりましたよ」

「われらはこちらで一歩も動かず待ち受けていたのじゃ。そのようなことがあろうはずはない」

「と申されても、番頭さんはお茶室でお薄をいただかれて、ご商売の用事を済まされて、裏口から出て行かれました」

「そんな馬鹿な話はないな。われら、供の者を残して帰られようか」

「そんなことを言われても困ります」

女は平然と言い放った。

「よかろう、それがしが奥を改させていただく」

磐音が女を押し退けて奥へ進もうとすると、黒い影が何人も行く手を塞いだ。

「およう様も言われておる。そんたの連れは裏口から戻ったのじゃ。そなたらは置いてけぼりを食ったようじゃな。今なら走れば間に合おう」

先頭の夏羽織が言い放った。用心棒の首領の一徳寺大願か。

「さようなれば我らも退散いたそう」

言わねはあっさりと後ろ下がりに引き下がり、小部屋の前まで戻ると、

「宮松、引き上げようか」

と、なにか言いかける宮松を制して玄関に下りた。

格子戸を開け、敷石を伝うと門の外に出た。

おようと呼ばれた女が磐音太刀の様子を窺って外まで送りに来た。

「造作をかけたな」

「早く行かないと番頭さんに追いつけませんよ」

おようの言葉を背に聞いて、真っ暗な道を二、三丁ほど戻った。すると道端に地蔵堂が見えた。

「宮松、どうのなかで一人待てるか」

「坂崎様、あそこに戻られるので」

「老分どのは間違いなく享楽庵に囚われておられる。どこぞに連れ出される前に助け出したい。そなたは、ここにて待て」

「老分さんは大丈夫ですよね」

「何としても助け出す」

「お願いします」

宮松の声に送られて、磐音は再び梅村後流の別邸享楽庵に引き返した。

道々、磐音は備前包平の目釘を確かめた。

これで仕度は終わった。

茅葺きの門前に戻った磐音はぐるりと享楽庵の周囲を巡った。

敷地はおよそ千五、六百坪か。母屋の裏手に茶室、百姓家、納屋や蔵が点在していた。

裏口の板戸は半ば開いたままで、風にがたがた鳴っていた。

磐音は裏戸から敷地に入り込み、まず先ほどまでいた母屋に戻った。

磐音は竹の葉の擦れ合う音に紛れて、座敷に接近した。

葦戸の向こうに茶人風の中年男とおよう、それに用心棒の浪人二人が酒を飲んでいるのが見える。

一人は、磐音に帰るように命じた夏羽織だ。

茶人が梅村後流だろう。

「今津屋の番頭も用心棒を連れてきたところまではよいが、あれではなんの役にも発たぬな」

「いや、素直に引き上げたとろこが怪しいといえば、怪しい」

夏羽織野言葉に梅村後流が答えていた。

「後流どの、町方に訴えたところで、あやつらが動くのは明日のことだ。その頃に、今津屋の番頭はこの世から消えておるわ」

「借用書をおれの懐に残してな」

後流が笑った。

「あの浪人が戻ってくる心配はありませんよね」

おようがだれにともなく訊いて、夏羽織の一徳寺大願が、

「槇原、百姓家の連中に注意を怠るなと申しておけ」

と部下に命じた。

「一徳寺どの、早く始末したほうが手っ取り早いと思うがな」

「そうだな」

と一徳寺が応じ、後流を振り見た。

梅村後流が手を顔の前で払って、承知した。

「ならば、すぐにも始末します」

槇原と呼ばれた浪人が刀を手に廊下に出た。

母屋の裏口から槇原が庭に出たのを確かめ、磐音は動き出した。

風邪のざわめきが磐音の行動を助けた。

母屋から茶室まで敷石が敷かれ、庭も手入れされていた。だが、その周辺の敷地は未だ雑木林のままだ。

その間にうねうねと道が通っていた。

磐音は槇原の背後に接近した。

槇原の足がふいに止まり、彼方の柄に手をかけながら振り向いた。

「おまえは」

槇原が何か言いかけ、刀を抜き放とうとした。

素早い対応だった。

が、磐音の動きは更に俊敏を極めていた。

長身の背を丸めて突進すると、刀を抜く槇原の懐に飛び込みざま、包平の鞘ごと抜いて、柄頭で相手の鳩尾を鋭く突いた。

槇原がくたくたと倒れこむ。

磐音は槇原の刀の下げ緒で槇原の手足を縛った。懐にあった手拭いを口に突っ込み、藪の陰に転がした。

「これでよし」

磐音は呟くと百姓家に歩み寄った。

夏のこと故、戸が開け放たれて部屋の様子まで見えた。

蚊遣りの煙がもうもうと部屋に充満して、見通しが悪い。それでも、今津屋の老分番頭の由蔵が大黒柱に縛りつけられているのが確かめられた。

浪人とやくざ者が七、八人、所在なげに板の間にいた。

磐音が拳ほどの石を拾うと、茅葺屋根の裏の竹藪へと投げあげた。

その石が見事に屋根を超えて竹藪に落ち、がさごそと音を立てた。

「おい、なんぞ」

浪人の一人が仲間に言いかけると、

「念のためだ、調べてこい」

と命じた。

やくざ者たちが懐に合口に手をかけながら、裏へと飛び出していった。

大黒柱の周りに人がいなくなった。残った浪人太刀も裏庭を見通す部屋の向こうに集まっていた。

磐音は足音を忍ばせて、玄関から土間に入り込んだ。すると由蔵と目が合った。磐音は手で静かにするよう命じると、包平を抜いた。一気に大黒柱の下まで飛び上がると切っ先で縄目に当てて切った。

その気配に浪人が振り向いた。

「なんだてめえは」

「用心棒は用心棒の仕事をせぬとな」

磐音の手にある包平二尺七寸を見た浪人が、

「今津屋の用心棒のご入来だ」

と仲間たちに沈んだ声音で教えた。

「なんだと！」

一斉に仲間が振り見た。

「まずは番頭より先にこやつをたたっ斬るとするか」

と仲間に声をかけた。

裏庭に飛び出していたやくざ者たちも、すでに抜いていた合口や長脇差を手に走り戻ってきた。

「どうだ、このままの家から消えぬか」

「しゃらくせえ！」

若いやくざが合口を振りかざして突っ込んできた。

荒仕事に手慣れた者の動きで俊敏を極めていた。だが、すでに包平を抜いていた磐音に叶うはずもない。

今夜の磐音は最初から居眠り剣法を捨てていた。

山車師の一家を心中に追い込んっだと知っていたからだ。

手元に引き寄せておいて、合口を握った手首を地擦りから刎ね斬った。

「げえっ！」

やくざが切り飛ばされた手首を抱えて板の間を転がり回った。

「おのれ！」

浪人の頭分が太刀を突きの構えにして、飛び込んできた。

磐音の包平が虚空で反転して、突きを払った。払った包平が胴切りに変転した。流れるような剣捌きで淀みがない。

深々と胴を抜かれた頭分が土間に転がり落ちた。

「次はだれか」

「おのれ！」

声がしたほうとは別の方角から殺気が押し寄せてきた。

板の間に、暗がりから鉄砲玉のように飛び込んできた影があった。

長脇差を右の脇腹にピッタリとつけた男が磐音に襲いかかってきた。

磐音は罵り声を上げた浪人の目を据えまま、長脇差の男を手元に呼び込んだ。

包平はすでに正眼に変じていた。

脇腹突き出される長脇差野切っ先は無視して、磐音は喉頸を刎ねた。

ぱあっ！

と血飛沫が飛んだ。

その飛沫を避けるように、罵り声を上げた浪人に突進していた。

阿修羅のような磐音の攻撃に浪人は、上段に振りかぶっていた剣を慌てて振り下ろした。

その物打ちが剥き出しの梁に食い込んだ。

磐音野包平が再び胴撃ちを見せて、攻撃者の胴を薙いだ。

浪人は火が入っていない囲炉裏に顔から突っ込み、転がった。

「次はだれか」

一瞬の打ちに四人が倒されていた。

「すぐにも南町奉行所の手入れが入る。縛りにつきたいものは残っておれ」

磐音の虚言に迷わされた用心棒たちは、慌ててその場から逃げ出した。手首を切り落とされたやくざも必死で逃げる仲間に加わった。

ふいに百姓家に静寂が訪れた。

「老分どの、お怪我はございませんか」

「ないない。こやつらの一人や二人どうとでもなったが、坂崎様が助け出しに来てくれると思うて、じっとしておったのです」

「それは賢い洗濯にございました。こやつらは、血に飢えた者です。何をやらかすか、知れたものではありませんからね」

「はてさて、今津屋の由蔵を起こらせたらどうなるか、梅村後流に教えて進ぜましょうな」

由蔵がきりきりと眉を上げた。